

モンゴル風物誌 : ことわざに文化を読む

著者	小長谷 有紀
発行年	1992-06-09
URL	http://hdl.handle.net/10502/4580

プロローグ

三百六十度みわたすかぎり草原がひろがっている。ゆるやかにうねりながらひろがる緑の絨毯は、どこまでつづいているのだろうか。絨毯はゆるゆると傾斜地をのぼり、やがて森へと徐々に消える。あるいはまた、いつのまにか緑色がはらはらと薄れて、忽然と消える。

そんなモンゴル草原を舞台にして、人びとは家畜とともにくらしてきた。かれらの生活は、わたしたちの生活とおおいにちがっている。きっと、かれらの頭の中も、わたしたちとは異なっているにちがいない。なにが真理で、なにが美德で、なにが善悪なのだろうか。わたしたちとおなじ人生観をもっているとはかぎらないのである。

モンゴルの遊牧生活については、人びとの中に身をゆだねることによって、いくらか理解できるかもしれない。しかし、いくら人びとの生活を知っても、ただちに人びとの頭の中まで知ることとはできないように思われる。思考様式というものは、生活様式にくらべれば、分析するのもちろんのこと抽出するだけでもむずかしい。

本書は、モンゴル遊牧民が、そのくらしをベースにして構築してきたことわざの世界を少しずつほぐしてゆくことよって、かれらの思考様式をさぐるうとしたものである。モンゴルの風土とともに、その精神的風土をことわざによりとらうというのである。

人生の真理というものは、ある程度までなら文化をこえて共通しているであろう。ただし、同義同類の真理が、かならずしも類似した表現でかたられるとはかぎらない。むしろ、まったく表現がちがうにもかかわらず、おなじ真理がかたられるところに、各文化のおもしろさをみいだすことができよう。

また逆に、表現がかなり類似しているために、てっきりおなじ真理がかたられているにちがいないと思っていると、意外にもまったく異なる意味がたくさされている場合もある。しばしば逆もまた真であるし、そもそも真理は一つではない。

ネコがいないような草原では、「ネコに小判」はなんというのであろうか。また、ネコがいても魚がないなら、「ネコに鯉節」はなんというのであろうか。そもそも、そういう概念をあらわすことわざはあるのだろうか。モンゴルらしいことわざの表現を楽しみながら、その奥にかくされた人びとの頭の中にあるモンゴルの風景をあじわうことができれば、きつともっと、楽しいにちがいない。ことわざを通じて、異文化への旅に出かけよう。